

要旨

本論文の目的は、ロシア語イントネーションを実験的手法を用いて検討すること、そして実験結果に立脚してロシア語のイントネーションパターンを記述できる新しい音韻論的枠組みの構築を目指すことである。

第1章「導入」ではまず、近年の音声研究において「イントネーション音韻論 (intonational phonology)」と呼ばれている研究分野とはどのようなものかを概観する。まず、本論文におけるイントネーションの「音韻論的記述」とは何か定義する。次に、音韻論的ではないイントネーション研究とはどのようなものかを示す。次にイントネーションが音韻論的に研究され得る証拠を概略的に示す。上の議論を行った後で本章では、ロシア語イントネーションの先行研究、特に最も有力である E.A. Bryzgunova による記述と C. Ode による記述を検討し、これらの枠組みは音韻論的研究とはみなせないということを示し、ロシア語イントネーションの新しい音韻論的枠組みを構築する必要性を強調する。

第2章「自律分節韻律理論とイントネーション音韻論」では、まず近年のイントネーションの音韻論的研究において標準的な理論となっている「自律分節韻律理論 (AM 理論)」を適用した記述の枠組みとはどのようなものかを、J. Pierrehumbert によって提案された英語イントネーションの枠組みを解説しながら概観する。次に基本的なロシア語のイントネーションパターンを記述するために、AM 理論を適用した予備的な枠組み（「初期枠組み」）を提案する。（この「初期枠組み」は本論文で行われる実験結果に立脚するかたちで第6章で大幅に改訂される）

AM 理論における措定を概略的に要約する以下ようになる。まずイントネーション曲線は発話の特定の位置に指定された H（高）L（低）という2種類の音韻論的な水準トーン (level tone) の連鎖であるとみなされる。トーンの連鎖は、ストレス音節に生じるピッチアクセント、フレーズの最後に位置するピッチアクセントに後続しフレーズ終端まで波及するフレーズアクセント、そしてフレーズの終端に生じる境界トーンから構成される。ピッチアクセントは6種類同定され、単独トーンから構成されるもの (H*, L* と表示される) と複合トーンから構成されるもの (H*+L, H+L*, L+H*, L*+H と表示される) がある。ここでスター(*)は、ストレス音節に連結する (=ストレス音節と時間的に一致する) トーンを表す。スターの付与されていないトーンは、音節に連結せず、連結したトーンに一定の時間的間隔をおいて先行・後続するトーンとされる。フレーズアクセントは2種類同定され、それぞれ H, L と表示される。境界トーンも2種類同定され、

それぞれ H%, L% と表示される。これらの音韻論的トーンは種々の写像規則が適用されることによって、音声学的に実現される。

ロシア語の基本的なイントネーションパターンを記述するために予備的に提案する枠組みでは、すべて複合トーンから構成される 4 種類のピッチアクセント(H*+L, H+L*, L+H*, L*+H)と、H, L という 2 種類のフレーズトーン（本論文ではフレーズアクセントをこのように呼ぶ）が同定され、境界トーンは定義されない。このような音韻表示とその音声実現である F0 曲線を写像する規則は、本章では提案されない（写像規則は第 6 章で提案される）。

第 3 章「非最終上昇ピッチアクセントの不変特徴」では、イントネーションパターンを特徴付ける音声学的特徴の不変特徴を探求する。検討するのは、平叙文を中立的に読んだときに生じるイントネーションパターン（「中立パターン」）を構成する上昇ピッチアクセントである。

イントネーションの不変特徴を検討することは、イントネーションの最小単位とは何かという理論的課題にも関与する。イントネーション研究には最小単位を上昇・下降などの運動ないし形状とする見解（形状観）と、H, L などの水準トーンであるとする見解（水準観）の 2 つがあり、2 つの見解のどちらが正しいかを論じることは、イントネーション研究における古典的な議論となっている。AM 理論は先述の通り水準観に立っている。もし上昇ピッチアクセントを構成するトーン(LH)の音声実現と考えられる F0 底点(valley)・F0 頂点(peak)など（これを変曲点と呼ぶ）の分節音列における時間的位置（これを同期(alignment)と呼ぶ）と F0 値が不変特徴であるのならば、水準観が支持される。反対に、上昇の継続時間や傾きが不変特徴であるのならば、形状観が支持される。

実験では、発話速度の低下による分節音の継続長の伸張と、声の大きさの増大による声域(pitch range)の拡大という音声学的条件下において、上昇ピッチアクセントに対応する F0 上昇の分節音列に対する同期、上昇の継続時間、傾きを計測する。結果は、F0 底点・頂点はほぼ一貫してストレス音節の始端付近、終端付近にそれぞれ同期することを示した。この結果は、F0 底点・頂点が一貫して分節音列の特定の点に固定されるという他言語に観察される現象が、ロシア語にも観察されることを示すものである。また実験結果は、上昇の継続時間は分節音の継続長と相関して変動することを明らかにした。一方、上昇の傾きは不変特徴とはみなせないものの、その変動が一定の範囲内に限定されることを示唆する結果も得られた。これらすべての結果は、形状観、水準観の双方と両立が可能であり、どちらかの見解の優越性を示すものとはならなかった。

第4章「疑問詞疑問文と真偽疑問文に生じるイントネーションパターン」では、2種類のイントネーションパターンの間の音声学的な差異が検討される。検討されるのは、疑問詞疑問文(WHQ)に生じるイントネーションパターンと、真偽疑問文(YNQ)に生じるイントネーションパターンである。

ロシア語イントネーションの先行研究では、WHQとYNQにはそれぞれ異なるイントネーションパターンが生じることが報告されており、それらのパターンの間の音声学的な差異はあたかも自明であるかのように記述されてきた。しかしながらこれら2種類のパターンのF0曲線を観察すると、双方とも上昇下降形状を有しており、互いに極めて類似していることがわかる。音声学的に類似するこれら2種類のパターンの差異の詳細な検討は、先行研究においてほとんどなされてこなかった。

実験では、長短様々なテスト文を用いて、2種類のパターンの音声実現であるF0曲線が計測される。結果は、2種類のパターンの音声学的な差異が、上昇終了点であるF0頂点のストレス音節に対する同期、F0頂点のF0値、ストレス音節付近に観察される上昇開始点であるF0底点の有無にあることを示した。下降終了点であるF0底点の同期とF0値、発話終端における点のF0値には両者の間に差異は観察されなかった。これらの結果のほとんどは先行研究において報告されていない新しい知見となる。

第5章「『2種類の』下降パターン」では、イントネーションパターンを何種類同定すべきかという課題に取り組む。検討されるのは、「中立パターン」を構成するピッチアクセントのうち、第3章で検討しなかった、フレーズ最後の語のストレス音節におけるF0下降として実現される下降ピッチアクセントである。この章では当該のパターンを「下降パターン」と呼ぶ。

下降パターンと同定できるF0曲線を詳細に検討すると、F0下降とストレス音節との同期がかなり変動することがあることが分かる。F0下降がストレス音節に対して早めに同期するF0曲線と遅めに同期する曲線は、単一の下降パターンの連続的な変動と解釈できる可能性と、範疇的に異なる2種類の下降パターンと解釈できる可能性がある。後者の解釈はF0同期の差異が2種類のピッチアクセントを範疇的に区別する特徴として機能することを含意している。ロシア語イントネーションの先行研究には、ロシア語に2種類の下降パターンを同定するものもあるが、2種類のパターンを区別する音声学的特徴に関して意見は一致していない。F0同期の差異によって区別できる下降パターンが存在しているとする見解は、C. Odéの研究にみられる。

実験では、連続的なF0頂点位置を有する一連の刺激音を被験者に聞かせ、聞いたものを模倣させるというImitation Task手法が用いられる。この手法では、刺激音に対す

る被験者の応答における F0 頂点の同期が計測され、刺激音における頂点位置と比較される。もし応答における F0 頂点位置が 2 種類の離散的なグループに分離されるのであれば、F0 同期の差異は 2 種類の範疇を区別する特徴として機能し、ロシア語に F0 同期の差異により範疇的に区別できる 2 種類の下降ピッチアクセントが存在するとする見解が支持される。結果は概して、応答における頂点位置が 2 つの離散的なグループに分離されることを示し、2 種類の下降ピッチアクセントが存在するとする見解を支持するものとなった。またこの結果は、C. Odé の記述の妥当性を異なる方法論を用いて示したことになる。

第 6 章「ロシア語イントネーションの新しい音韻論的枠組み」では、これまでの議論、特に第 3 章から第 5 章で行われた実験結果に立脚して、ロシア語イントネーションの新しい音韻論的枠組みの構築が試みられる。提案される枠組みは基本的には、標準的な AM 理論を適用するかたちで提案された「初期枠組み」を改訂したものとなる。しかしながら、第 3 章から第 5 章で行われた実験は、標準的な AM 理論の枠内では記述が不可能であると思われる結果を示している。このような実験結果を記述できるロシア語イントネーションの枠組みを構築することを目的として、この章では標準理論の拡張も行われる。したがって、本章で行われる議論は、AM 理論の枠内でロシア語イントネーションを記述することに終始するものではなく、新しい AM 理論を提案することにより、イントネーションの一般理論の発展に貢献することもできるものであるということができる。

新しい枠組みを構築する際に特に焦点が置かれるのは、「高さの次元」と「時間の次元」のとりあつかいである。高さの次元とは音韻論的にはトーンの水準の次元であり、音声学的には F0 値の次元のことである。時間の次元とは音韻論的にはトーンと分節的単位との連結の次元であり、音声学的には変曲点と分節音との同期の次元である。標準的な AM 理論におけるこれらの次元の取り扱いでは、本論文で行われた実験結果の一部を妥当に記述することができない。本章ではそれらを記述できるように標準理論を改訂する。そして、第 2 章では提案しなかった、音韻論レベルの記述と音声学レベルの記述を写像する規則を提案する。

最後にこの章では、新しい AM 理論を適用した枠組みを用いて、本研究で実験を行って検討したパターンを含めたロシア語のイントネーションパターンの音韻表示を提案する。

第 7 章「結論」では本論文の議論を要約し、本論文が取り組むことのできなかつたロシア語イントネーション研究全般の課題を論じる。